

2025年 10月 6日

立教大学国際学術研究交流制度
2025年度「派遣研究員」報告書

1. 派遣概要

所属・職	文学部・教授
氏名	佐藤 雄基
派遣機関名	Faculty of Asian and Middle Eastern Studies, University of Cambridge 所在国：イギリス
研究テーマ	ケンブリッジ大学図書館所蔵興福寺文書および英国の日本学に関する調査
派遣期間	離日～帰国のうち、派遣研究員の期間を記入（私費滞在や他の研究費による延長等は含まない） 2025年9月1日～ 年9月7日（7日間）
研究経費	486,670円

2. 派遣期間中の活動

離日日および帰国日を含め、派遣期間中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。

活動内容記入例）○○に関する調査、○○氏と研究討議、共同研究、講演、視察等

年月日	活動内容
2025年9月1日	離日
9月2日	大英図書館で調査
9月3日	Polina Barducci氏（ケンブリッジ大学）らと研究討議
9月4～5日	ケンブリッジ大学図書館でワークショップ
9月6日	イギリスを出国
9月7日	帰国

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果、今後の研究の展望、本学と派遣機関との研究交流にかかる成果、展望等を記入してください。

当初の研究計画通り、ケンブリッジ大学図書館所蔵興福寺文書について、原本調査を含めて、共同研究者の Mikael Adolphson 氏、Polina Barducci 氏 (ケンブリッジ大学)、Colton Runyan (ウェズリアン大学)、George Wollaston 氏 (東京大学) とともに Kōfukuji Historical Documents Workshop を実施して、集中的な討議を行うことができた。同図書館所蔵の興福寺文書は、所領経営関係の文書が破棄されて、その紙背を再利用して、中世仏教のテキスト (抄物) が書写されたことで近代まで伝来し、近現代では抄物の紙背文書 (当初の紙の利用法である所領関係の文書) に価値が再発見されるに至った。日本中世における古写本の機能・伝来論という観点からも興味深い事例であり、古文書原本というモノを素材にした国際比較や共同研究の土台となることが期待できる。今回は、The Great Britain Sasakawa Foundation の支援を得て招待した仏教学者の師茂樹氏 (早稲田大学) と興福寺の僧侶の南俊慶氏、中世史研究者の守田逸人氏 (香川大学) の三名とともに熟覧し、抄物としての史料的性格を確認することができ、中世寺院における教学 (抄物) と社会的基盤 (紙背文書) との二面性とその関係性について議論を深めることができた。現在刊行準備中のケンブリッジ大学所蔵中世文書をめぐる論文集と今後の共同研究に関する展望を得る場となった。

また、ワークショップとともに、ケンブリッジ大学図書館の元ライブラリアンの小山騰氏に案内をしていただき、ケンブリッジ市内を巡検し、立教学院史とも深い関係性をもつ近代日英交流に関する史跡を確認することができた。今後日本資料の形成過程を軸にした海外日本研究に関する学史的研究を進める必要性とその可能性について確認する機会となった。

ケンブリッジに先立って調査を実施した大英図書館 (ロンドン) では、東寺関係の中世文書を閲覧し、翻刻を作成した。今後研究を進めていく予定である。

